

つながりの不思議さ：飯田市の歴史と社会関係資本

原田 博夫

今回（2014年2月25日（火）～27日（木））の長野県飯田市調査ほど、不思議な縁、つながりを感じたことはなかった。まずは、大学（慶應義塾大学経済学部）時代以来の友人（綿治硝子店（有）代表・原治義）が飯田市で家業を継いで事業を営んでいることもあり、26日（水）夜に同地で旧交を温める予定だった。しかし、25日（火）昼に、牧野光朗市長をはじめとして市役所関係者の連続講義のシャワーを浴びたその夜、市役所関係者数名に導かれて入った二次会の居酒屋には、偶然にも、東京から出張中の取引業者を連れて会食をしていた私の友人がいた。したがって、期せずして予定日の前日から懇親を深めることになった。そこで彼が初めて語ったのは、実は自分の実弟（原久・税理士行政書士）は、牧野市長（現在は3期目）の対立候補として2期目（2008年）の選挙に出馬していた、ということであった。私自身、牧野市長の前職である日本政策投資銀行での同僚の方々とも少なからざる知人のいることから、そうした方々の志向・行動と牧野市長のユニークかつ精力的な市政運営がシンクロナイズする点など、同日昼の講演・説明および夜の懇親会（一次会）でも納得していたところなので、地元の立場からすると、それとは異なる問題意識や課題があるかもしれないと、改めて感じた次第である。

それはそれとして、飯田市の関係者の話をいろいろ聞くにつけ、どうも1947年（昭和22年）の大火は、飯田市のその後のまちづくり・展開に大いに影響しているのではないかと、というのが私なりの直感・印象だった。したがって、これらの事情を調べるために、当時の記録や記事・記載を探すべく、友人の娘（原麻貴）さんに、飯田市図書館で関連文献を抽出してもらい、そのうち数点にまずは目を通し、全体像を把握することにした。それが、『飯田大火から40年—火と水の災禍を越えて—』（飯田市東野公民館刊、1987年11月10日）と飯田市歴史研究所編集『飯田・上飯田の歴史（下）』（飯田市教育委員会発行、2013年3月31日）である。これらにザット目を通した結果、大別して、2つのことが判明した。第1は、大火のみならず山崩れ・洪水などの自然災害の影響の甚大さ。第2は、飯田出身の方々とのつながり・関係の不思議さ、である。以下の記述・事実関係の多くは、この2冊によっている。

まずは第1点から。第二次世界大戦後に限っても、飯田市は数次の自然災害を被った。1946年7月15日、飯田駅前より出火し、198戸が焼失、850人が罹災、被災額は2,000万円に及んだ。しかし、それ以上の大火が翌年発生した。1947年（昭和22年）4月22日（日）正午少し

前、花見気分で多くの市民が外出していた市街地の一角（上常盤町）から燃え広がった炎は10時間にわたって延焼、市街地の八割に相当する204,000坪を焼失させ罹災戸数3,577戸、罹災世帯4,010戸、罹災人口17,771人に達し、死者1名、行方不明2名、重傷者80名、軽傷者89名、見積損害額15億円に及ぶものだった。この大火は、第2次世界大戦の直接的な被害を受けずに済んだ飯田市にとって、連続的にいきなり出鼻をくじく出来事だった。それどころか、なんとこの日は、第1回参議院議員選挙の投票日だった。そもそもこの1947年4月は、選挙が目白押しだった。4月5日は、統一地方選挙で、初の公選による知事選と市長選が行われ、飯田市長には、前市長・遠山方景は公職追放で出馬できず、元上飯田町長・高田茂が初当選していた。4月25日は衆議院選挙が、4月30日は統一地方選挙で県会議員・市会議員の選挙が予定されていた。結局、4月22日の参議院選挙は飯田市では中断せざるを得ず、4月25日の衆議院選挙と同日に、再選挙された。

ただ、この大火の後の復興計画は、全国的には戦災からの復興に遅れが目立った中では、かなり急速に進んだ¹。そのポイントは、防災を強く意識して、街路の拡張や幹線道路の設定などによる市街地の整備を、市民の協力（30%前後の減歩）によって進めたことである。いわゆる「りんご並木」の街路もこの時整備されたものである。この復興計画およびその成果は、市民の協力の上に、全国からの支援も無駄にせず、迅速に計画し実行に移せた成功例といってよい。しかも、「りんご並木」のアイデアと実行は、復興計画がほぼ完成した1952年夏から53年冬にかけて、飯田東中学の生徒たちによって行動に移され、それが『朝日新聞』（1954年1月28日夕刊）の一面記事「今日の問題」というコラムに掲載されたことから、全国的に知られ、中学生の活動も継続するようになったようだ。

この街路整備事業ならびにその手入れに市民が参加する構図・スタイルは、その後の、飯田市がさまざまな事業を進める上で、貴重な前例となったことが推測される。しかし、実はこの復興計画そのものの財政負担は、その後の飯田市政の展開に大きな制約あるいは枷となった。市町村合併の経緯を辿ってみると、1953年に制定された町村合併促進法（いわゆる「昭和の大合併」）によって、1956年9月、1市7か村が合併して新制飯田市が発足した。しかし、南接する鼎町は（1954年4月に村から町になったばかりで）、大火後の復興事業で負債の多い飯田市との合併によって、住民税が高くなるのではないかと懸念や²、農村部の自治体との合併によって、せっかく鼎町として目指していた都市的行政の実現が困難になることへの心配から、この時の合併には応じなかった³。他方、北接する上郷町は、村有林である野底山（のそこやま）

¹ すでに1949年には復興計画の80%が完成し、その時点での全国の復興都市の平均が35%に比べると、その進捗率は格段に高い。1950年代以降は全国的な緊縮財政のため、全国ではさらに進捗が遅れた。

² 当時は自治体ごとに住民税の課税方式が異なっていた。

³ しかし、鼎町は1984年には、単独で飯田市と合併している。

からの収入で道路・病院などのインフラがすでに整備されていた。この野底山は、当時の上郷町の住民の意識では「宝庫」「生命線」であり、合併を「命がけ」で拒否した⁴。

この1947年（昭和22年）の大火およびその復興事業も大仕事だったが、新制飯田市が発足してから5年後の、1961年（昭和36年）6月下旬の、伊那谷全域を襲った未曾有の集中豪雨による（風越山・虚空蔵山の）山崩れ、土石流、（野底川の）洪水などの被害も、甚大で広範囲に及んだ。伊那谷全域では、死者・行方不明者130名、家屋の流失・全半壊約1,500戸に及び、うち、飯田・上飯田でも、死者・行方不明者10名、重軽傷者13名に上った。この災害は、飯田の台地が風越山の裾野に広がる扇状地として形成されていたこと、そしてそのライフラインの脆弱さを改めて認識させるもので、現地では、1715年（正徳5年）の未満水（ひつじまんすい）以来の大水害として、「三六（さんろく、または、さぶろく）災害」と呼ばれている。

1955年4月、戦後3回目の飯田市長・市議会議員選挙が行われ、市長には現職・高田茂（上飯田）と新人・松井卓治（飯田）の一騎打ちとなり、商店街の結束を背景に大飯田建設を目指した新人・松井が初当選し、1968年までの長期政権となった。しかし、この間の「三六災害」（1961年）などによる災害復旧費の増大は飯田市財政を圧迫し、1965年度には、一般会計13億円に対して18%の赤字を計上し、1966年1月定例会市議会では、地方財政再建促進特別措置法の準用を受けることが決議されたが、この財政再建計画は1968年までに何とか達成された。

こうして度重なる自然災害への後始末や備えを通じて、下伊那地域の中心都市としての飯田市は都市計画事業を進め、苦悩の中で市街の装いを変えてきたことが分かる。いわば、この地で展開している人々の生活の変容は、終わることない自然と人間の知恵比への歴史とでもいえようか。

続いて第2の、飯田出身者の方々にも言及しておきたい。まずは、専修大学にとって外すことのできない人物は、今村力三郎（1866年～1954年）総長であろう。上飯田村羽場の蜂谷重蔵・きよの長男に生まれ、1884年（明治17年）に両親と上京し、また、同村の今村うめの養嗣子となった。創立（1880年（明治13年））間もない専修学校（現専修大学）を首席で卒業後、代言人（弁護士）として活躍し、すでに戦前、大逆事件などの著名な刑事事件をいくつも担当し、戦後の混乱期（1946年）専修大学に招かれて総長に就任し、私財をなげうって89歳で没するまで総長職を務めたことは、『専修大学の歴史』（平凡社、2009年9月16日）や、先の飯田市歴史研究所編集『飯田・上飯田の歴史（下）』（飯田市教育委員会発行、2013年3月31日）p.132にも記載されている。加えて、同書によれば、飯田との関係では、上飯田の羽場共有林の共有権確認にも力を尽くし、1937年の飯田町との合併では、多額の寄付もしたようである。しかし、

⁴ しかし、ここ上郷町でも、1993年、単独で飯田市と合併している。

現在は飯田市に、今村力三郎の手がかりになるものはほとんど残されていない。

日本画家・菱田春草(1874年～1911年)は、飯田町仲ノ町に生まれ、岡倉天心の指導の下、横山大観、下村観山、木村武山などととも、北茨城五浦(いづら)の地で日本美術院に参加し、新しい日本画の創出に取り組み「朦朧体」を切り拓いた。茨城県出身の私にとって、菱田の名前と絵画は、横山大観と常にセットで想起される存在である。菱田はしかし、短命だったこともあってか、東京美術学校を目指して上京後は、数回しか故郷・飯田には戻っていないようである。しかし、名品「菊慈童」は、2002年から、飯田市の所蔵作品となっている。

日本民俗学の父・柳田國男(1875年～1962年)も、飯田には縁がある。そもそも、兵庫県の儒者・松岡操の6男に生まれ、東京帝国大学を卒業し農商務省に入省後、1901年に、柳田家に養嗣子として入籍したが、養父・柳田直平(1849年～1932年)は旧・飯田藩士で大審判事だった。直平4女との結婚は1904年だが、國男自身も何度か飯田を訪ね、伊那谷・飯田地方の民俗信仰(津島御師)に関する著書もある⁵。

ここまでの方々は、私にとっていわば歴史上の人物である。直接の面識はない。しかし最後に、古島敏雄(1912年4月～1995年8月)・東京大学名誉教授に言及したい。古島先生は⁶、飯田の開業医の息子として生まれ、旧制飯田中学、旧制第八高等学校、東京帝国大学農学部農業経済学科を卒業後、1938年に東京帝国大学農学部講師、以後、助教授、教授になり、1960年からは一橋大学経済学部教授も併任され、1973年～82年は専修大学経済学部教授でもあった。学位論文は「元禄時代に於ける農学の発展とその地盤」で、1949年に授与されている。私の専門分野は歴史学とは異なるので、古島先生の学問スタイルや業績を評価することはできないが、歴史実証主義の堅実な学風だったと窺っている。しかし、それよりも、わずか数年間のお付き合いしかなかった私にとっては、古島先生の穏やかな風貌と語り口が印象的であった。その古島先生が飯田のご出身だったことは、全く気付かなかった。しかし、先の飯田市歴史研究所編集『飯田・上飯田の歴史(下)』(飯田市教育委員会発行、2013年3月31日)に目を通したとき、しばしば、古島敏雄『子供たちの大正時代—田舎町の生活誌—』(平凡社、1982年5月10日)への言及があることに気付き、改めて思いが及んだわけである。

そうなのだ、古島先生は飯田の出身だったのだ、そしてこの著書は、地方都市(田舎町)飯田の生活およびその変遷をたどる際、まずは、二度の大火(1922年(大正11年)5月4日と⁷、1947年(昭和22年)4月22日)を画期として、人々の生活や意識が変わる部分もありながら、

⁵ 柳田國男『東国古道記』1952年。

⁶ 私が専修大学に入職したのは1980年4月からなので、古島先生とは数年間のお付き合いに過ぎない。しかし、直接の面識をもって、以下では、古島先生と表記させていただく。

⁷ 関東大震災は、1923年(大正12年)9月1日に発災しているが、遠方の子供にとっては、やはり直接的な記憶・思い出はほとんどないようである。

あるいは変化していない様子も描いていたのだ、ということに思い至った。1922年の大火は自分の幼少時代の記憶を失わせ、1947年の大火は青年時代の記憶を潰えさせた。それにもかかわらず、特段の資料や文書に頼ることなくほとんど自分の記憶を基に、当時の飯田での生活ぶりやディテールをあくまでも子供・少年の目線や感性で拾い上げ、その動線に沿って描いたのがこの著書だったのだ。その描写からは、人々の生活ぶりが生き生きと浮かび上がってくる。特に私にとってショックだったのは、その結果、この地方都市（田舎町）に住んでいた当時の人々の、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の豊かさが期せずして見事に描かれていることである⁸。その記述は、ちょうど、中勘助（1885年～1965年）の『銀の匙』（1913年・15年）が、小児・少年からみた明治末期・大正初期の身边およびその心象風景が描かれ、社会状況はあくまでも背景になっているのに対して、古島敏雄『子供たちの大正時代―田舎町の生活誌―』（平凡社、1982年5月10日）は、大正中期の人々の生活ぶりを、子供の視線・行動半径から描写している。その結果、期せずして、当時の人々の生活がいかにか相互扶助と助け合いの上に展開されていたかが、手に取るように浮かび上がってくるのである。

たとえば、当時（20世紀初頭）の日本の大半の都市の街場には住居と一体となったさまざまな仕事・職人・商店・小商売があった。そうした仕事と生活は隣近所がお互いに連続的に繋がっていて、始終、やり取りし行き来していた。子供たちはこうした親同士の繋がりを意識しながらも独自のネットワークを形成し、それを見事に活用して生活を展開していた。しかし、21世紀初頭の現代、ショッピングセンター、スーパーやコンビニが隆盛を極めると、そうした生活感に裏打ちされた仕事ぶりは背景に押しやられ、表面には出てこなくなる。消費者の前にさらされているのは、きれいに表装され規格化した無機質な消費単位である。消費者もたまには反逆して、個性的なブランド商品などに手を出すこともあるが、それは消費全体を見ればアクセント・いろどりの域を出ず、そのウェイトは必ずしも高くはない。

別の例では、鉄道駅の場所をどのように決めたかという問題を、この著書ほど印象的に描いたものを他に知らない。たとえば、鉄道が敷設された当時は、鉄道の路線や駅はどの地方でも、必ずしも大歓迎されていたわけではなかった。とりわけ、人家の密集している旧市街地にとって、線路や駅舎は厄介者で、できるだけ敬して遠ざけたかった。したがって、町外れに迂回して設置されることがよくあった。ここまでは多くの地方史に登場する話である。その上で、どこに駅舎を設定するかについて、同書末尾の「駄馬から自動車へ―町の交通―」では、極めて鋭い観察と推測をしている。飯田駅の場合、具体的には、中心市街地が低地にあっただの対

⁸ 私自身は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として専修大学社会知性開発研究センター／社会関係資本研究センター（2009年度～13年度、研究代表・原田博夫）を進めてきたので、古島先生がすでに当時、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）のアイディアに近い見解をもっていたことに大いに親近感を覚えた。

して、かなりの高所に設定したのは、鉄道で運ばれる貨物を、当時の大店が丁稚・小僧たちを使って荷車で下す手間と労働を軽減するためだったのではないか⁹、というのである。この鋭い洞察を小学生がすでにしていたことは、驚嘆に値する。そして、荷車が上下する様を具体的に記憶し、後年、臨場感にあふれた文章にしたことにも敬意を表したい。

しかしながら、その古島先生は、専修大学を退職後、全く突然、1995年8月29日に、ご自宅（東京都下）の火災で、夫人とともに亡くなられた。焼死である。焼け残った先生の蔵書（約500冊）は、その後、飯田市図書館に寄贈されたと窺っている。改めて、ご冥福を祈りたい。

2014年5月18日記

⁹ 逆に、駅に荷物を取りに行くときは、荷台は空で、当然、荷車は軽いので、坂道を登るのもそれほど苦痛ではない。